



中学生になったら、すこしは大人のように
と思っていた。

けど、ぶかぶかの学ランを着た自分を見て「な
んか弱そう・・・」とがっかり。

「どうせ、すぐに大きくなるから」と親は言う
ものの、萌え袖を見えているとため息がでる。
小学校を卒業したからといって、見た目も中身
もあまり変わらないまま、ランドセルを手放し
て学ランを着るようになっただけ。

クラスメイトの顔ぶれも代わり映えがなくて、
まあ、おかげで、とくに問題なく新しい学校生
活を送れた。

クラスのみんなは大半が顔見知りで、和気あい
あいとできたし、先生もみんな優しくて頼りに
なる。

なかでもぼくが慕っていたのは体育教師の中條
先生。

新任の若くて爽やかなイケメンで、アマチュア

の競泳選手としてバリバリ活動しているから、筋肉質な体のスタイルが抜群。

そんな約束した覚えはなかったけど、大きいおちんちんで、ぼくの濡れたおちんちんをにゅちゅにゅちゅ♡されて、たまらなくて「ああうっ♡お父さあ、ご、ごめ、なさああ♡」と呼んでしまう。

すごく恥ずかしくて、でも、「はひい♡お父さんっ♡ああ♡」と呼ぶともっと気持ちいい。

「んっ・・・千晴はいい子だね。

ほら、いい子だから自分だけじゃなく、お父さんも気持ちよくしてくれるよな？

お父さんと千晴のおちんちん握ってシコシコして？そしたらご褒美あげるから」

言われたとおりにして、それだけでは足りないような気がして中條先生の太ももの上で腰を跳

ねてちゅぷちゅぷっ♡



進学をきっかけにぼくは学区外の私立中学校へ行った。

小学校のころにイジメられて、首謀者を取り巻きと離れたかったからだ。

そいつらのいない学校生活を送れることにほっとしたけど、心機一転して青春を謳歌して楽しもう、とは思わない。

いじめに荷担しなくても、見て見ぬふりをしたクラスメイトのことも「イジメられるお前に原因があるんじゃないか？」とぼくを責めた担任教師のことも忘れるのは無理だ。

もう二度とイジメられなくなかったし、同い年のやつらも大人も信用できなかったし、必要最低限に話をするだけで、深くは関わろうとしなかった。

幸い、クラスメイトも教師も変なやつはいなくて、ぼくが当たり障りなく接してもべつに気にしないで適当に放っておいてくれた。

一人を除いては、だ。

それが体育教師の権堂。

柔道を嗜むいかついゴリラで、古くさいジャージを着ていつも竹刀を持って、よく怒声をあげて振り回している。

「竹刀でシコレ、影山」と命令されて、冗談じゃないと思う。

これはハラスメントを越えて、未成年に対する立派な性犯罪だ。

「やっぱり大人はみんな腐っている！警察に逮捕させて、社会から抹殺してやる・・・！」と怒りと憎しみが湧きあがったけど、なぜか、目の前の竹刀に抱きついて「はあうう♡んんう♡ああうっ♡」と腰を上下させる。

竹刀を太ももでぎゅうぎゅうに挟んで、ちんこを擦りつけてぬちゅうぬちゅうぬちゅう♡
権堂に冷ややかに見下ろされていると思うと、屈辱だし、殺してやりたいと思うのに腰を止められない。

